

2019.5  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

5号

第41巻  
No.358



トネリコ *Fraxinus japonica* Blume（モクセイ科 *Oleaceae*）

**生薬** シンピ（秦皮） 春から夏に樹皮を剥ぎ、陽乾する。

**成分** クマリン類：aesculin, aesculetin, fraxin, fraxetin, fraxinol、フェノール誘導体：syringin、糖類：mannitol, tannin 等。

**効能** 消炎、収斂薬として下痢や解熱に。尿酸排泄作用があり痛風に。結膜炎などに煎液で洗眼する。白頭翁湯などの漢方処方に用いる。

生薬 シンピ

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



本州中部以北の湿った山地に自生または植栽される日本固有種で、高さ15m、幹径60cmにもなる落葉高木です。樹形が直立し、湿地を好むことから新潟県や富山県では田の畦に植栽され、刈り取った稲を干す稲架木として使いましたが、コンバインの普及などであまり見かけなくなりました。また、街路樹や公園樹として植えられることもあります。材は緻密で粘りがあり、バットやテニスラケット、農具の柄、家具材として使われています。昔は枝を弓の材料として使われたり、樹皮を煮詰めたものを墨に混ぜて写経に用いたこともあります。葉は有柄で5-7枚の奇数羽状複葉、小葉は広卵形~長楕円形、長さ5-15cm、幅3-6cmで鋸歯縁、小葉柄があります。5-6月に散形状の円錐花序をだし、淡緑色の細かい花を多数つけます。雌雄異株で花冠はなく、雄花には2本の雄ずい、雌花には退化した2本の雄ずいと1本の雌ずいがあります。果実は翼果で倒披針形。

同属植物のアオダモ (*F. sieboldiana* var. *serrata*) も樹皮を秦皮と言ひ、トネリコと同様に用います。北海道、本州、四国、九州、南千島、朝鮮半島に自生する落葉小高木で、成長が遅く、材は緻密で反発力と弾力性に優れ、耐久性にも優れることから、トネリコよりバットには適しています。寒冷地のものほど優れているため、北海道産が重用され、現在は資源が枯渇状態です。枝を切って水に入れておくことで aesculin が水に溶けて藍色の蛍光を出すことから「アオ」の名が付きましました。樹高が少し小さいこと、小葉はほぼ無柄で広卵形~長楕円形、長さ4-10cm、幅1.5-3.5cmとトネリコより小さいところからコバノ(小葉の)トネリコの別名があり、花は細い白色線形の4枚の花弁を持つところもトネリコとは異なります。『出雲風土記』(733)に「凡諸山野所在草木」に秦皮とありますが、分布からトネリコではなく、アオダモや同属のシオジ (*F. spaethiana*)、ヤチダモ (*F. mandshurica*) などでないかと推測されます。

『本草和名』(918)には「秦皮、和名止祢利古乃岐一名多牟岐」とあり、『倭名抄』(931-937)に「石檀、和名止禰利古乃木一云太無乃木」と和名が記されています。「とねりこのき」は同じモクセイ科の樹木イボタノキ (*Ligustrum obtusifolium*) やトネリコ属に付着したカイガラムシが分泌する蠟を戸の溝に塗って滑りをよくした「戸塗り粉」から転訛したという説や粘り強い枝をねじって結束用に使ったところから「十練りコ」、樹皮を煮詰めたものを墨に混ぜて写経に用いたことから「共練り濃」、君子に仕えて雑事をする官職の「舎人子」に由来するなど諸説があります。また「たむのき」は『万葉集』に「磯の上の都万麻を見れば根を延へて年深からし神さびにけり」(大伴家持)と詠われている「つまま」が語源で、「たぶ」、「たむ」、「たご」に訛ったものといわれ、クスノキ科「タブノキ (*Machilus thunbergii*)」の古名ともいわれています。モクセイ科植物の中にもヒトツバタゴ (*Chionanthus retusus*)、アオダモ、ヤチダモの名で残っています。『本草綱目啓蒙』(1803)には「この木、寒地に多し。葉は呉葉莢葉の如しにして、大にして鋸歯あり。……一種、葉小にして鋸歯ありて、ニガキ (*Picrasma quassioides*) の葉に似たる者あり。下品なり。一種小葉の者は鋸歯なくして……弁細く、白色、後実を結ぶ。形同じくして小なり」と三種の秦皮を挙げています。寒冷地に適していることから前者はトネリコ、次のニガキの葉に似たものは何者か判断が付きませんが後者のものは白色の花弁からアオダモではないかと推測されます。

(村上守一 記)